

NEWSインサイド *Inside*

# 「集団」「個別」の指導を併用しては

—現状を考えると、何を優先すべきでしょうか。最も危惧されるのは、若

年者における梅毒の大流行です。中絶は、2000年代初期をピークに下降傾向



を示しているため、喫緊の課題は性感染症の予防にあります。

梅毒の感染力は強く、キスだけでも感染し、母子感染もするため、コンドーム使用の必要性を伝えるだけでなく、実際そのものを價

## 木原 雅子・京都大学大学院准教授に聞く

重に考える必要がある時代が到来しています。

—今回の都教委の調査では4割以上が学習指導要領にはない内容の指導が必要と考えています。学習指導要領に沿った指導で対応できるのでしょうか。

これまでの膨大な調査結果(35万人を超えるデータ)と、私が開発したWYSH教育モデルによる授業の効果評価の経験から、可能であると思われる。

—具体的な指導方法、WYSH教育モデルとはどのようなものでしょうか。

例えば、同じクラスの中に、性に関する情報をかなり持っている生徒から、まったく興味・関心もない生徒まで混在しますが、大多数の中学生は無関心期にあると推測されます。

無関心期とは「問題(日本の場合は梅毒の大流行)をまったく知らない、あるいは、知っているも自分に

は関係ないと思っている」時期で、その後、関心期「自分にも関係することは分かったが、自分の行動を変えるまでには至っていない時期」を経て、「行動期」「維持期」という段階を経て、適切な行動選択がなされます。

各行動段階によって、指導内容や指導方法は変える必要があります。例えば、無関心期では、一般的な情報提供と、自分たちにも関係するという意識を持たせるリスクパーソンチャイターションが重要です。

具体的には、一般的な梅毒大流行の情報だけでなく、各生徒が居住する都道府県でも流行しているという地区情報を提供するので

このような自己のリスク認知取得後に、具体的な予防方法の提示つまり、コンドーム使用の必要性を指導するのです。さらに、関心期の生徒には、具体的な情報や詳細な情報提供をしていきます。

クラス全員への授業(集団指導)と保健室等での指導(個別指導)を併用すると、行動段階(発達段階)に応じた指導が可能となります。つまり、クラス全員に対しては、指導要領に即した授業を実施し、授業中や授業後に、もっと詳細な情報が欲しいという要望

や、この部分が分からないという疑問を持つ生徒たちという疑問を持つ生徒たちは、いわゆる関心期であるため、集団指導よりも広い範囲を扱える個別指導で対応していくことが考えられます。

きはら・まごこ 京都大学大学院医学研究科社会疫学分野准教授。医学博士。国連合H教育の視点「あの学校が同エイズ計画共同センター長。生まれ変わった驚きの授業」インターナショナル。『日本でも財団』『中学校の600日物語』など。

理研員。著書に「10代の性行動と日本社会」そしてWYSH教育の視点「あの学校が生まれ変わった驚きの授業」『日本でも財団』『中学校の600日物語』など。